

二八〇

北越雪譜

二編 春



北越雪譜
二編
四卷

越後

鈴木牧之編撰

天保辛丑新刻

江戸

京山人百樹增修

書肆 文溪堂

京水百鶴畫圖

發販



北越雪譜二編叙



小越雪譜六卷裁後塩澤鈴木牧之老人
 雪窗園炫寒烟隱几隨筆其事出實脚
 徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣
 嚮者郵筒懇乞校訂者之爰刈蕪蔓披擲著
 英先輯之卷以爲初編告約使書肆文溪堂刊布
 之於後越者之奇千彙萬狀供卽遊資錦室
 婦妾市客妻婢以詳知越靈解士通人或云

雪譜二編

序一

格致之助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書
 梓類乞嗣撰蓋以知吾越稿在也余謂不踏越地
 不可說越事仍丁酉之夏携兒京水越遊救
 十日有紀行作再採數條刪補翁之稿稿以爲二
 編稿定將置序言有頃者晚春連日於晴紅酣
 綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠
 以療錐毛之痲矣夫成田山香火之盛世之可知也凡
 自江戸到成田者抵小網衝橋岸買搭船水路直

往行德都人皆以為捷徑蓋行德一市會也不必成
田者火者搭船常滿列于橋岸待行客是以俗呼
茲岸云行德河岸呼茲船云行德船余亦隨次
搭船其所供載者多是庸界雜沓猥褻衆口喋
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許從一童偈
士可二十四五誇嘗輕俊殆似學究商半老樓撞
市樣相俱接膝余籍默不敢出一語凡屋漸去盡岸
茅葺櫻杏浮雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫

頗水行之會心也船既過半途庸界多就賦
嘈自羅寒之可悅壯士出墨斗持懷楫覓句果
兄書生也老僧以鑿鑿鏡披書士渴筆曰尊者所
執是何書僧曰北越雪譜士曰僕嘗讀之免固冊子
何足比閱僧曰貧乞一錫畱于北親知越雪故特購之
供以續笑今閱京山人序彼少識字乎士曰否不
夫京山者文場之奴隸藝苑之僮儷也近年隨落
子穉史院本之泥中汚塗姓名遂不能脫其窠窟

種姓彼自者。未子漁。金人瑞之流。亞文家爭。海
之。年僧哈然笑而不應。余佯睡。別之商已。日鄙人
書要也。能識刊行之趣。凡上梓之書。不編編輯之荒
誕。與河孝之奇。馬只以多。鬻為大著述。奉其作
者。為搖鈴。樹翁。種感服。顏士。秋。書若其不。唾
而不顧。是書梓之通。義曹耦之常態也。北越雪璫
初編之梓。一舉。數七百餘部。刷板裝本。至不暇給。
故一編。刻。散。免。當。有。近。矣。士。不。然。其。言。猶。在。不。止

雪譜二編

序三

數。嘗。用。類。鼓。僧。手。釋。卷。曰。論。說。姑。置。足。下。藏。京。山
年。否。士。曰。不。識。僧。曰。我。十。年。前。與。彼。會。於。一。轉
舍。僅。得。一。面。談。不。為。無。母。緣。言。畢。遽。然。拍。余。背。
曰。京。山。老。人。醒。眠。長。兄。忘。我。歎。余。悵。然。不。得。應。時
船。者。行。懷。之。岸。舟。中。之。人。皆。上。岸。不。得。如。余。叨。吐。歎
于。茲。矣。此。夕。然。其。言。於。逆。旅。燈。下。以。為。序。云

天保十一年庚子潔月

京山人有樹并書



北越雪譜二編凡例

此書全部六卷收之老人が眠を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走墨亂寫一圖も亦竹画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其駁雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一りの三卷書費の請小應じ老人小告て梓を許し以世小布し小發販一舉して七百餘部を鬻り是小依て書肆後編を乞ふ然ども余が机上宅の編筆小忙々屢稿を脱るの期約を失ひ而も近見務て老人が稿本の殘冊を訂し以其乞小授く牧之老人ハ越後の聞人あり嘗貞女朴實を以聞え屢縣監の褒賞を拜して氏の國稱を許し生計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒來別号翁も鴻書の友あり而も余も亦是小嗣ぐ老人余小越遊を樂しと年あり余固山水小耽の癖あり而も小遊心動きたまふ事小物て果さて丁酉の晩夏遂小豚見京水を從て啓行を始り越後の諸勝を尽さんと思ひ越地小入後年稍侵して穀價貴踊

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

人心穩るるむゆゑ小越地を踐こと僅小十グありあうととも旅中小於て耳目を新小せし事を奉て此書小増修も百樹曰といりの是也

前編小載する三國嶺の圖ハ牧之老人が草画小倣て京山私儲満山小松樹を再り余越遊の時三國嶺を踰し小此嶺ハさうあり前後の連岳をへく松を見む此地小くもて越後ハ松の少き國あり三國嶺を知る人ハ松を画しを笑ふ

是老人が本編の誤り非も京水が蛇足あり山川村在さうあり凡物の名の訓と清濁小りて越後の里言小たひひするも

あつた然ども里言ハ多く伏訛あり今姑俗小承りあり本編ハ音訓の假名を下さむかあづけハ余が所為あり謬を本編小驅こと勿き

余也固淺学小て多く書を書不讀寒家小て書小不富少く藏せも屢祝融小奪きて架上蕭然さう依之増修の説小於て此事ハ彼書小見と賞も其書を

を藏せざるハ急就の用小弁せむ職癖をさるか多し且淺学あるハ引漏

よるも最まうるべし

本編雪の外他の事を載るハ雪譜の名を空する小似とて姑記して好事の
話柄小具を増修の説も亦然り

雪の奇状奇事其大槩ハ初編小出せり猶軼事有を以此二編小記を已小初編小
載るも事の異なるハ不舎して之を録を蓋刊本ハ流傳の廣きりのゆゑ初編を

讀む者の為小まるの意あり前後を讀人其層見重出を詰こと勿と
釋の字釈小作の外譯を訳驛を取小作ハ俗ありあるとて卷中驛澤の字迄

姑俗小从うて取沢小作り以梓繁を省く餘の省字ハ皆古法小从ふ
卷中の画老人ハ稿本の拙画を真ハ或ハ京水ハ越地小字一真景或里人の話を

聞く圖小作りるもあり其地小照して誤を責ることありと
老人編を嗣の意ありゆゑ小初編二編とのハ前編後編としとて

天保十一年庚子仲春

京山人百樹識

雪譜二編卷之上

ロニ

文溪堂藏

一之卷目錄

越後の城下

古哥ある旧蹟

雪の元日

雪の正月

玉栗。羽子擧

雪吹小焼飯を賣

雪中の戲場

家内の氷柱

雪中の用具

輻の説

寒氣の力

シガ

夏の雪

削氷

雪の多少

浦佐の堂叅

通計十六條

北越雪譜二編 卷一

卷之一

越後塩澤 鈴木牧之編撰
江戸 京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ノ距リ一專國史小見ゆ今ハ七郡を以テ
一國トモ東小岩船郡古ノ石小作蒲原郡新瀉ノ湊此郡小屬西小魚沼郡海小
北小三嶋郡海小刈羽郡海小南小頸城郡海小古志郡海小以上七郡也
城下ハ岩船郡小村上内藤侯蒲原郡小柴田溝口侯黒川柳沢侯三日市
柳沢彈正侯一萬石陣營三嶋郡小与板井伊侯刈羽郡小椎谷堀侯古志郡小長岡牧野侯
七方四千石頸城郡小高田神原侯糸魚川松平日向侯以上城下ノ外頗豊饒を爲
是処魚沼郡小小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊。出雲崎刈羽郡小
柏崎頸城郡小今町あり蒲原郡ノ新瀉ハ北海第一ノ湊あり六福地たり

雪譜二編卷之上

文溪堂裁

夏論を俟む此餘の豊境ハ姑畧を此地皆十月より雪降るその深と
浅と六地勢小よる猶末小論せり

○古哥ある旧蹟

蒲原郡の伊弥彦山弥一伊弥彦社を當國第一の古跡とを祭るところの
御神ハ饒速日命の御子天香語山命あり 元明天皇の和銅二年の垂
跡とを社領此山五石の高山五石ありと越後の海濱八十里の中やど小
独立か山脈さの山まもつらむ右小國上山左小角田山を提攜て一
國の諸山あ是は小對ひ拱き揖いをさ如ごとくいつまの山まより見えて實は小越後の
鎮ちんともあるるぎ山ま是はよりりわらあらととあらるるさままとと命こともも小垂
跡しままししくくとと此御神の縁起或ハ灵驗神宝の類記るぎぎ夏なああままここああまま
ともとも姑ことと小省せう○さて此山をよよる古哥こ小こ万葉まのや日子ひのの神かみささび
青雲あののななああびびくく日ひをを小雨こととややああるる又家持また小このの彦ひこのの神かみののああまま

小けりむらかのこやまをんかそのまぬきえつ角つらららら▲長濱 頸城郡小
在り三三島郡とせり 家持の哥小「ゆきうろ雁のつぎを休むてふこまや名小
かふ浦の長濱」▲名立 同郡西濱小あり今宿の名小よふ 順徳院の
御製小兼久のまゝ佐渡遷幸の時あり 都をささそく出今宵こよひもうた身名立の
月を見る哉▲直江津 今の高田の海濱をいふ 同御製小「あけが
聞きけが都のこひまふ此里をきよ山やまきら」▲越の湖 蒲原郡小濱
とよぶ処多し 里言小湖を濱とふその大なるを福嶋濱といふ 四方三里計
此濱小遠くびて五月兩山あり貫之の哥小「潮のわさ越の湖近けはた給
もまあるまま来きふり」又俊成卿小恨うらてまああるあるあせんあを心のこ越の湖
とろりあけま又為兼卿「年をへつりし越の湖ハ五月兩山の森の岸ら
▲柿崎 頸城郡小 親鸞聖人の詠玉ひとく口碑小傳へ哥小「柿崎小
まぶく宿をりとり小主の心志ありりありけり」按ある小聖人御名を

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

善信せんとちて三十五歳の時詭口小係りと越後小謫ある時小承元元
年二月あり後五年を経て勅免ありらども法を弘ん為とて越後小
いましとと五年あり故小聖人の旧跡越地小残まり弘法せ廿五年御歳
六十の時洛小飯玉つ 越後小五年下野小三年 弘長二年十月廿八日遷化壽
九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作あるら▲
此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原いま
も古哥あらども他國たもあるら名所あらぶたらら小越後とまさぶあらはらに
さて今を去ま夏子あり天保十一五百四十一年前永仁六年戌のと藤原為兼卿佐
渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君とのひ遊女をめ
玉ひ小初君が哥小「のあひら路の浦の白浪も立くるあるあり
とととまきけ」此哥吉瑞とありてや五年たらるらのち嘉元元年為兼卿
飯洛ありら九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

とら玉下り是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り
里俗初君屋敷との貞享元年秋門萬元記との初君の哥の碑
ありしか断破しを享和年間里人蓮修し今存せり

○雪の元日

凡日本国中ふ於て第一雪の深き国は越後ありと古昔も今も人の
事ありあつとも越後ふ於ても最雪のあつこと一文二文ふらば我住
魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつる夏
三郡小比まよぶ浅し是を以論むらば我住魚沼郡ハ日本第一小雪の
深降所あり我々の魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年
の三四月のころまで雪を視事已小六十余年近日此雪譜を作らば雪
小麓居のまよふあり。さて我塩沢ハ江戸を去ること僅小五十五里あり直
道を量らばあや近うづ雪の降る時あは健足の人の四日ありは江戸小

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

いづるづー其江戸の元日を聞かば縉紳朱門の夏はあつとぞ市中ハ千門
万户千歳の松をかざり直る。御代の竹をたて太平の七五三を引こ
ふ新年の賀客麻上下の肩をつら福を往來をふ万歳もうち
まどつら女太夫と鳥追ひの三味線ふらでた哥をうらひ娘の児の
やり羽子男の児の帟鷲見のの聞のめだなきあふ初日影花を
小きー昇る實小新玉の春こそはげは其元日も此雪国の元日も
同元日あつとも大都會の繁華と邊鄙の雪中と光景の替りたる事
雲泥のちがひあり。○そも我里の元日野も山も田圃も里も平一
面の雪小埋り春を知らば庭前の梅柳の類も去年雪の降る秋の末
小雪を厭く丸太をこまき繩縛ふ過るま雪の中ふありと元日の春
をさるるまよふ人も三四月ふらば梅花を不見翁が向ふ春も
猶景色とての月と梅と吟ぜり大都會の正月十五日ありまよ

山里さんりハ万歳ばんざい遅おそ梅うめの花はなハ邊鄙へんぴの三月さんがつありづー門松かどまつハ雪ゆきの中なか一建いけん
 七五三しちごさんうづりハ雪ゆきの軒のきハ引ひこし礼者らいしやハ木履ぎぞをきこ従者じゆしやハ藁靴わらぢあり
 雪徑ゆきぢハ階級かいかいある所ところハ主人しゆじんもさうづつハ死しるる此こゝげこさうづつハ
 礼者らいしやハうぎてさぞ人ひとハ皆みなさうり雪ゆき全ぜんく消きる夏なつのそぞめハうぎさささ草くさ
 履りをそく事ことありささまぶ元日げんじつの初日影はつじつかげハ惟ただ雪ゆきの銀世界ぎんせかいを照てるもの
 一ツとて春はるの景色けしきを不み見み古哥こかハ花はなをのぞ持もらん人ひとハ山里さんりの雪間ゆきまの
 草くさの春はるを見みせむや一ハ雪ゆき浅あき都みやこの事ことせりー雪国ゆきくにの人ひとハ春はるハ
 春はるをさささるをのぞ生涯しやうがいを終おることをおのぞハ繁はげ榮さか豊とよ腴ゆの大都會たいとくわい
 小住こぢハ羊やぎハ歳としハ梅柳うめりゅう煖色ぬるまじの春はるを樂たのむ事こと實じつハ天幸てんこうの人ひとハのぞ
 ○雪ゆきの正月しょうげつ
 初編しゆへんハもつる如ごとく我國わがくにの雪ゆきハ鷲毛じゆまうをのぞ稀まあり大おほくハ白砂しろすなを降ふせか
 如ごとく冬ふゆの雪ゆきハささハ凝凍こりやうことなく春はるハうぎささハとわること鉄石てつせきのごとく

驛中の正月積雪の圖



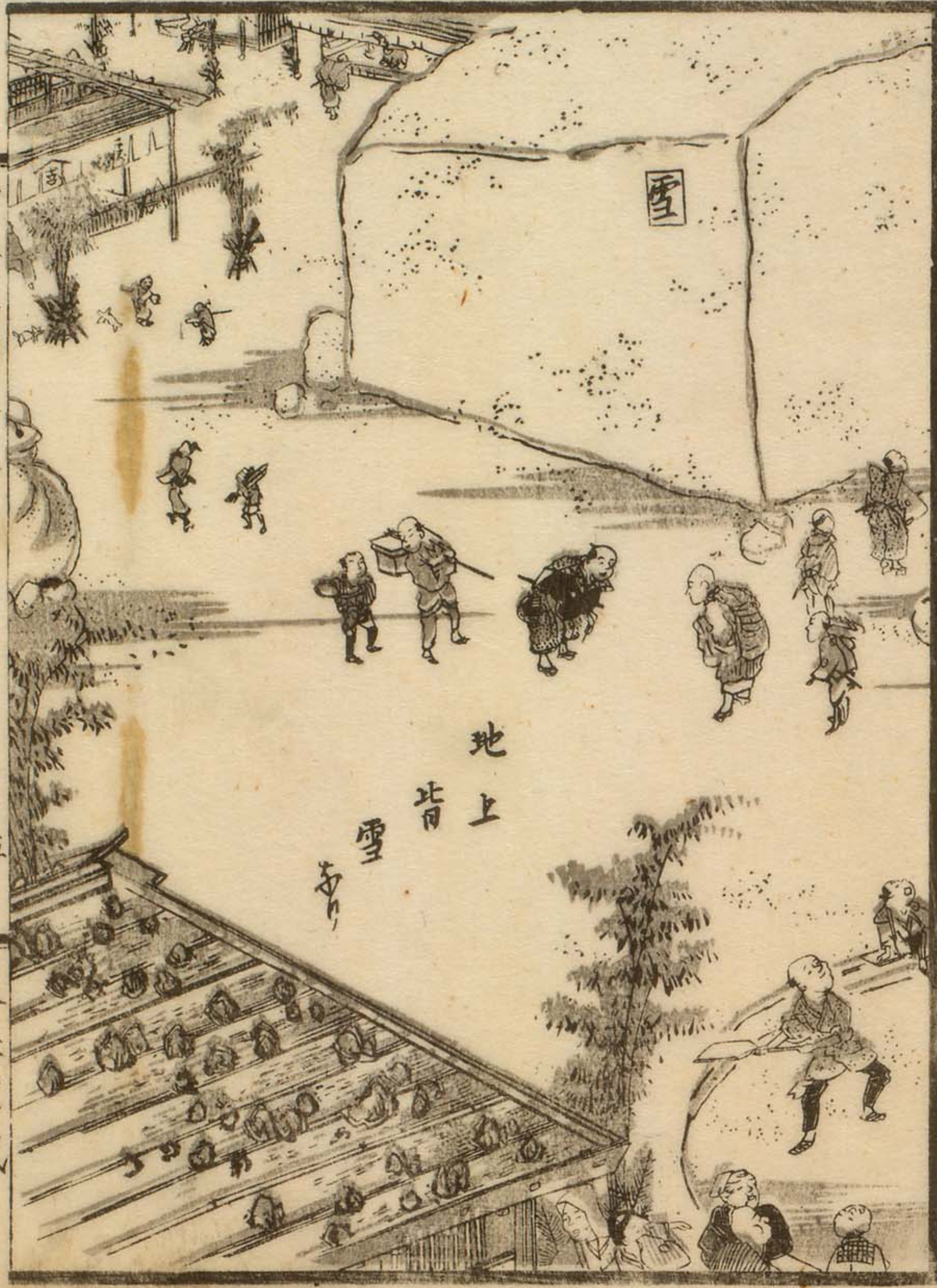
雪

雪

地上

皆雪

也



冬の雪のこりこりさるハ濕氣あり乾る沙のごとくあるゆゑあり是暖国の
 雪ハ異処ありさるごとくこりこりさるハ雪解とさるのさるごとくあり
 春ふりこりても年ふりこりてハ雪の降こと冬ふりこりてハ積こと五
 六尺ハ過ぎ天地ハ陽氣有を以てさるごとくハ春の雪ハ解らも年一
 志らさるごとく雪のふるさる年ハ春も屋上の雪を掘ことあり掘らハ柵の
 木中く作りさる木鋤少く土を掘ごとくこり取捨るを里言ハ雪を掘と
 りハ已ハ初編少くこりかやうハせさるごとく雪の重ハ屋を潰ゆゑありされハ
 旧冬の家毎ハ掘除さる雪と春降積らる雪と道路ハ山をさるごとく下ハ
 らるを圖をえてもあるごとくハ雪ハ家よりハ高ゆゑ春を
 迎る時ハこりこりさるごとく日光を引んてハ明をとる処の窓ハ遠る雪
 を他処ハ取除るあり然るハ時とてハ一夜の間ハ三四尺の雪ハ降らハ
 らるごとく家内薄暗心も朦々とて雑糞を祝ふとあり越後ハさるごとく

北国の人ハまづ雪の中ハ正月をもちハ毎年の事ハかゝる正月ハ暖国
の人ハ又せうくせむのいふ

○玉粟

江戸の見曹ガ春の遊ハ女見ハ繡毬羽子擲男見ハ紙鴉を揚がるハ
我國のごともハ春ふありても前ふりてごご地とて雪ありてさる如
けは歩行小苦路ハ遊を事少く玉粟との見戲
あり春中のおまひ始ハ雪を四成雑卵の大きハ握りて其上
と雪を幾度もけりて足先踏堅あるハ柱ハあてて壓堅こを肥
ゆきて手毬の大きふありて時他の童ガ作りて玉粟を庇下るハ置
しめ我が玉粟を以他の玉粟ふらあつて強き玉粟弱き玉粟を砕くを
ゆきて勝負を争ふ此戲所ハよく。コンボウ。コマ。地独樂。雪玉の
ゆきハ雪を。ズゴ。玉ゴシヨ。勝合とゆふあり此玉粟を作つるハ雪ハ少く

雪譜二編卷之上

塩しほを入るるハ堅あること石の如くゆきハ小見互ハ塩しほを入るを禁きんむるありて
を以てする時ハ塩ハ物を堅むる物あり物を堅實けんじつハするゆきハ塩藏しほづかハまを
ハ肉類にくるいも不腐ふふ朝夕嗽くちくちハ塩の湯水を以てて歯はをこめて歯の命を
長くまといハ玉粟ハ見戲あること塩の物を堅むる證あかしとまふたまり故ハ
あつ小記ちぎせり又童のあそびハ雪ゆき堂どうといふ夏あり初編ハいせり

○羽子擲

我里俗を移をつくとゆきをを
ゆきとゆきうちまのゆき

江戸ハ正月せ一人の話ハ市中ゆく見上るるゆきハ松竹を飾かざるゆきハ
美しく粧まひする娘むすめと彩いろどりする羽子板はねいとうを持もつ並び立たて羽子をつくとゆきハ
ふも大江戸の春ありとぞ我里の羽子擲ハ邊鄙へんびといふゆきハ
姿すがた小あつて正月ハ奴婢あひねども少ハ許ゆるぎ遊をさるゆきハ角力場かくりきやうのごとくふあ
んとまづ其処を見とて雪をまるとあつ角力場のごとくふあ
子ハ渡わた疏しを一寸とわご筒切つつぎふあこま小鶴つる雉とりの尾を三本さる

江戸の羽子うしこ小比こひ甚大ありことを擢ひ小雪こゆきを掘か木鋤こすきを用ふ力ふまをせ
て擢ひゆゑ小空こぞら小あがる夏甚高なつたかくやう小大ある羽子ゆゑ小童こども六むまで
らむあゝくまゝなる男女うちまゝ一いまもまゝきこゝるあど小く此戲このあそびをるを
あり一いつの羽子を並ならびさらしてつゝゆゑ小あやまらるゝ取落とりおちくするもの始はじめ
不定ありくあるゆゑハ雪をうちつけ又ハ頭くちより雪をあがまるその雪襟ゆきえり
懐なつかふ入りて冷つめ小耐たざるを大勢おほしが笑ふ窓まどよりことを視みるも雪中ゆきなかの一興いつきやう
あり京傳きやうでん翁おきなが骨董こつどう集あひ小上編かみ下学集げがくあひを引ひく羽子板うしこいハ文化十二年
より三百七十年さんひゃくしちじゅうねんをうりの前まへ文安ぶんあんのころあり一いものゆゑをまよりのも
あやさぬ小あり一い事ことハ詳つひあるまじきこといふまじき事こと又下学集げがくあひハ羽子板うしこい
小こコゴイタと両りやうカホをつけしむぶまじきの子といふも羽子の夏ありとあり我
国くにゆゑ江戸の如く小児女こにんのえねをつゝ形かたちもあり

○雪吹ゆきふ小焼飯こやきいりを賣う

塚山嶺雪吹圖



○風雪のまづ



雪国ゆきくによりへ煉懼物れんくもつの冬ふゆの雪吹ゆきふき。ホウラ春はるの雪顔ゆきかほあり此奇状このきじょう奇事このきじ
 已ま小初編このせうしゆへんゆもりりりりささささど一奇談いちきだんを聞きるゆゑゆゑささ小志このせうしりて暖国ぬるくに
 の話柄このわらべとと〇〇そももくく金銭かねせんの貴たかとと魯氏ろしが神銭論しんせんろんふふ尽つりりななままはは
 今いまささうういいづづくくももああららばば年としの内作うちさくいいりり事こと小臨このりんでで餓うれれるる時とき
 小判このせうばんをを甜あまくく腸はらハハ彭張ほうしやうをを餓うれれるる時ときの小判このせうばん一枚いちまいハハ飯い碗わんの光ひかりををるるささはは
 五十余年ごじゅうねん前まへの饑饉うれれの時とき或所あるところよりより餓死うれれるる人ひとの懐なご小判このせうばん百兩ひゃくらう
 ありありりりととままささぬぬ〇〇らら小我このせうがが魚沼郡うをぬまぐん敷上しかじやうの庄のむらの村のむらよりより農夫のうと一人ひとり
 柏寄このはくぎの駅えきふふりりるる此路程このちりぢやう五里計ごりぢやうあり途中ちゆうぢうよりより一人ひとりの芋いも總すべ商人あきかひし
 小遇このせうぐハハ路伴ぢやうばんふふありありりり往ゆけりけり時ときハハ十二月じふにがつののままどどめめありありりりがが數日すうじつの雪ゆき
 もも此日このひ晴はるるままはは西人さいにん肩かたををるるままはは心朗こころのびやうふふををりりああららまま已ま小塚このせうづかの山のやまととりりハハ
 小嶺このせうりやう小せうささりりかかりり時とき雪国ゆきくにの恒とことと晴はるる天てん俄あららまま小凍雲せうとううんをを布ふ暴風はうふう四方しやうほうの
 雪ゆきをを吹散ふきさんりりてて白日はくじつをを覆おほひひ咫尺しちせきをを弁べんせせどど袖襟そでえりハハ雪ゆきをを吹入ふきいれととりり全身ぜんしん

凍て息もつとあむむ大風四面よりふりまきりて雪を渦小巻揚る是
を雪国ゆき雪吹といふ此ゆき不意小あつものゆき晴天といふとも
冬の他行ゆき必装笠を用ふこと我國の常あり二人ハ積小雪を漕つ
雪小あつむを互小声をうけり助あひ辛く嶺を逾る小商人農夫小い
かり今日の晴天小柏寄まて何ともおのびざりゆき辨當をりて今
空腹小あつん心寒小堪むかて貴殿小伴と雪を漕こころむさ
せんの話小あつむの懐小弁當ありとまてぬ夫を我小あつむの
惟小貫ふまてり小銭六百あり死に活るの際小いりて此銭を何
あつせん六百ゆき弁當を賣玉といふ農夫ハ貧乏の者ありゆき
六百とまてり大よろむび焼飯二ツを出りて六百の銭小替けり商人
ハ懐小ありて温のさむぎ焼飯の大を二ツ食り雪小咽を潤し
精心健小あり前小あつん雪をこきけりかくていりて雪小吹

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

まも〜甚〜様を穿ゆ道避く日も已小暮あんと此時小い
ゆき焼飯を賣る農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足を
ゆき往農夫ハ屢後ゆき終ゆき棄て独先の村小いりて家の小
入りて炉辺小身を温り酒を酌始り蘇生するむむをりけり
〇さてあつ〜あつ〜と呼声速く聞るを家内の者まてつけ
あつ〜あつ〜ゆき人小あつ雪吹倒とて助けよと近隣の人を
よび集め手毎小木鋤を持り木鋤を持り雪小埋りし雪吹たるの
ありて大勢のゆきの一人の死骸を家の土間昇入しをりの商人も立寄
りて最前焼飯を賣る農夫ありとてあつゆき徳商人或時余が
俳友の家小逗留の話小件小事を語り出り彼時我六百の銭を惜
焼飯を買せんバ雪吹の中小餓死せんゆきの農夫が如くあつ〜今
日の命も銭六百のうちありとて笑ひ〜俳友が語り

○雪中の戯場

五穀豊熟しく年貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小遇一時
氏神の祭あど小遭しを幸小地芝居を興行する夏あり役者ハ皆
其処の素人あどハ近村近取より來るあり師匠ハ田舎芝居の
役者を備ふ始小寺あどハ群居く狂言をさざりてのちそとくの
役を定む此群居の議論紛々として一度ゆ果しう夏あり事定
りてのち寺小於て替古をそとむ技熟してのち初日をさざり衣裳艶
のるあハ是を借を一つの業とさるものありて物の不足あり此芝居
二三月の頃さる事あり此時ハいま雪の消ぎる銀世界ありさざり
芝居を造る処此役者等が家ハさざりあり親類縁者朋友より人を
出しあどハ人を備ひ芝居小屋場の地所の雪を平らう不踏か
舞臺花道樂屋棧敷のるあさど皆雪をあめてその形ふつと

雪譜二編卷之上

ありとく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りたる物天又人
工をたぎけて一夜の間小凍く鉄石の如くふるあゆむと大入小ても
さざりきの崩る氣づひる一孫生の頃ハ雪もや稀あどハ春色の空
を見く家毎小雪圍を取除くところあどハ処より雪かこひの丸太あ
るハ雪垂とく芽少く幅八九尺廣さ二間をりふつりたる簾を借
あつめとくまての日覆とあどハ花もハ雪あて作りたる上小板を
あつめとく此板も一夜のち小氷つとく釘付小あつりより堅く暖
国小比ま論の外あり物を賣茶屋をも作らむとあどハ処も平一面の
雪あどハ物を煮処ハ雪を窪り糠をちりて火を焼ハ雪の解ぎる事
妙あり○さて戯場の造作成就して春の雪あつりつとく連日晴を
見む興行の初日のびる時ハ役者ふありたる家ハさざり此をわを見ん
とく諸方小逗箇の客多く毎日空をあらめて晴を待らば客のり

あゝもあつゝ〜始倦果終小ハ役者仲間いひあらせ川の氷を碎
て水を浴干垢離〜晴を祈るもをり〜

百樹曰余丁酉の夏北越小遊び〜塩沢小在〜時近村小地芝
居ありと聞〜京水と俱小至り〜小寺の門の傍小杭を建て横
小長き行燈あり是小題〜曰 當院屋根普請勸化の爲本
堂小於〜晴天七日の間芝居興行せ〜むものあり名題ハ假名
手本忠臣藏役人替名とあり〜役者の名多くハ寢名あり
寺の門内小假店あり〜物を賣り人群をあるを芝居小假小
戸板を集〜囿〜入り口あり〜小守る者あり〜一人前何程と
價を取〜屋根普請の勸化あり 本堂の上り段小舞臺を
作り掛左小花道あり左右の棧敷ハ竹林簀薦張あり土間小
薦を布筵を〜旅の芝居大槩ハかくの如〜と市川白猿が話

雪中演場を造圖



地上
皆雪あり

雪国子校
桐ふ
画者不
知し
系うけ

寺



小もきうぬ棧敷のちかーとふ欲然やうな毛氈をうけらしろふ彩色
 画の屏風をたてしけのをきあり四五人の婦さる綿帽子さる
 邊鄙小古風を失ざる観人群をありて大入あるが猿の如き童ども樹
 小のわりてさるもあり小娘が荒を提す氷くととびさる土間の中を賣る
 荒のあつ木の青葉をさき雪の氷の塊をさる茶を賣つさを氷
 を賣るる甚めづし氷のこと削氷の條ふらづー○さる口上りひ
 出く寺へ寄進の物あるひ役者へ贈物餅酒のさる一人の名を
 拳品を呼ぶ披露ー此処忠臣藏七段目さるさる幕開
 ちかろ小折し山岩井玉之丞とさる田舎芝居の戯子ありー願う美
 あり由良の助小折し余が旅中文雅を以識人あり年若あれば
 かる戯をさるさるさるさる常めらるさる今坂東彦三郎小似
 たり技り又観不足り寺岡平右門ふありしハ余が客舎小きさる篋頭

ありてまゝも常小かたりて関三十郎小似て音声もまゝ天然と関三の
如し余京水と相顧て感し京水ならん小イヨ尾張屋と譽けり尾
張屋ハ関三の家号ある事通トぐまや尾張屋とやむるものひりりも
あり一幕ゆきゆきんとせし小守る者木戸をいさぎを便所ハ寺の後小
あり空腹ありバ弁當を買玉取次やさんとといふ我のまふあはれ人
又いさぎゆきゆきの小人散バ演場の蕭然を厭ふあはれ人
出所あはれんと尋し小此寺の四方垣をめぐりし出づきの隙あり折
あり童が外より垣をかぎり入りしその穴より兩人ぐりりせりハ
こゝも又可笑一ツゆきゆきあり

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟よりも高く春小ありても家内薄壁
ゆゑ高窓を埋る雪を掘のけり明をとるこゝ前小ありし如し此

雪譜二編卷之上

屋上の雪ハ冬のうちまむく掘のつ度小木鋤ゆきゆき屋
上を損むるまあり我國の屋上おやくハ板萱あり屋根板ハ他国
小比まハ厚く廣く萱する上小葺木といふ物を作り添石を置き
鎮し風を防の便とせこゝゆゑ小雪をやりつとといふまはくま
こゝありまどその雪のうへ小早春の雪ありつりし凍ゆゑ屋根のま
まをまむる春も稍深あるま雪も日あつハ解あるハ焼火の所雪早
く解ふ小いしゆかハ屋根の損トする処木羽の下をくりりまじて
雪水漏ゆゑ夜中俄小疊をとりつけ挿針のまあまをりをま
て漏をうくるる処を修治とせる小雪全くまえざるゆゑ手をこめて
まありま漏ハ次第小こりし座敷の内小いくまらも大なる氷柱を
見し時あり是暖國の人小えせしこゝ

百樹曰余越遊して大家の造りやを見し小楹の太と江戸の

土藏のことごとく天井高く欄間大なりこと雪の時明をとる
 とありあり戸障子骨太く手丈夫なるゆゑ國鴨柄も廣く
 厚くもて大材を用ふ事目を駛せりこと皆雪小潰ざるの
 用心ありとて江戸の町小の店下を越後小雁木敷といふ雁木の
 下廣く小荷駄をも率へきやどありこと雪中小の庇
 下を往來の爲あり余越後より江戸へ飯時高田の城下を通
 へり北越第一の市會あり高工軒を築く百物備へりこと
 の一両側一里合庇下つぎことその中を往こと甚に爽快ありき
 文墨の雅人も多しとき旅中年の凶なる小遭飯家を急
 ゆゑ刺を入し今小遺憾とせ

○雪中歩行の用具

雪中歩行の具初編小其圖を出し其製作を記さざらんべ

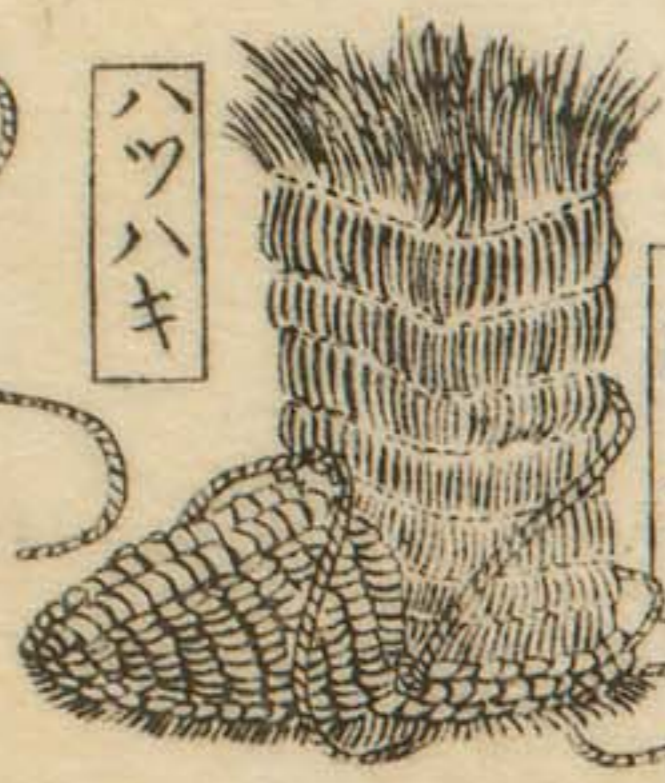
雪譜二編卷之上

その詳あるを示す

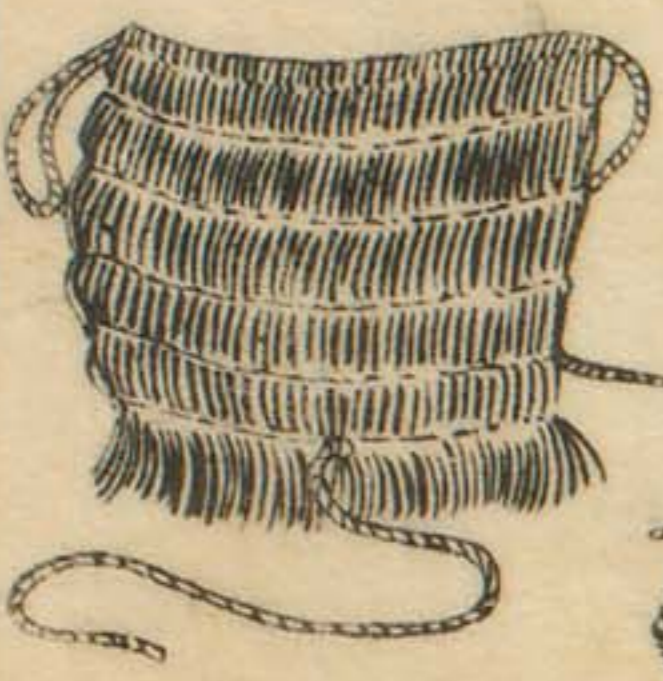
藁沓



深沓



ハツハキ



○藁沓はたけふあまのちりめはここのものを九けり
 あまのちりめ末小のちりめをば三助ふけおろし。をりり
 せん中あつ結びとむる是雪中第一の足履の之重しことを
 せし上品ありあまのちりめ白紙を用ひるもあつたこの
 おりてを切し

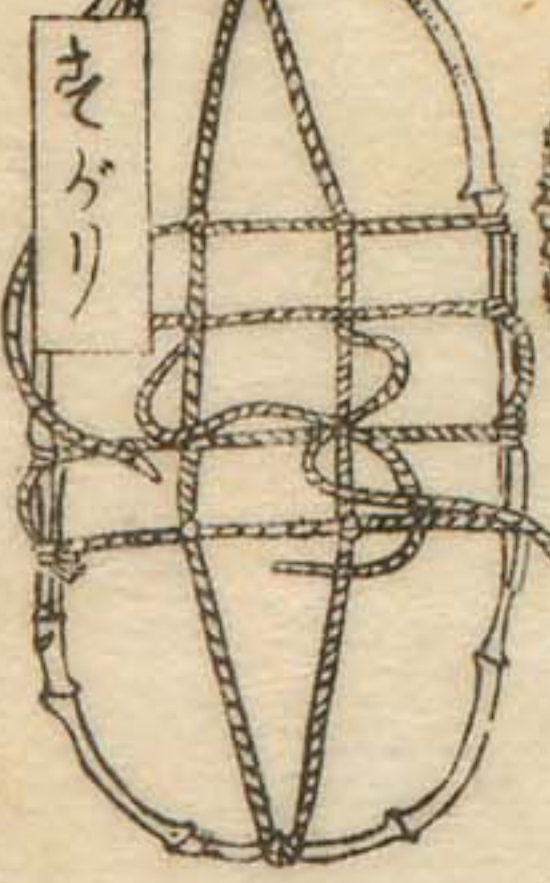
○足はちりめを作りあむ常の躰のまき毛をまき雪
 中小歩行して他の坐小つ時足をまきふおろしに
 あまのちりめ甚むりしきものありけ國大畧をまき
 ○他國の草あつ作りしを見る泥行め便ありけ
 我國の雪中の途小泥ある所なり。もあつたをこわ
 げのり外こもきつるげこ小物の尻・牛のつめなど
 さあつた名もあり男女の用その形もつりしどこのまきを
 圖せ

○ハツハキといふは里俗のまきありまきあつた裏脚ありこと
 めきあつたあまのちりめ補あつたも作り雪中あつたあまのちりめ
 うせき常山も用ふ作りやう圖を見まき大畧を知り
 雪のまきもの大まきあつたあまのちりめ作り

む休あて



かどき



きがり

○シナ皮を深山小ある木の皮少く作る寸尺ハ身小態
作らざるたて二尺三寸を二尺をりあり御あてとも
の前より吹つる雪をふせぐため小用ふ農業ふら
常あも用ふ他国ふもあるあり

○シブガラハあももどめの方を腫へあて左右の
こしを足頭へうもて作るあり里俗こし層の
あつらひるをシビとゆふこのシビあて作り足り
かきもちゆふ小シビガラこしゆふまをシブガラ
こと訛りゆふあり

○うんぎふ古訓あり里俗かきこゆふたて一尺二三寸
よと七寸五分分形圖の如くシヤガラといふ木の枝を
作る鼻は反しクマイブといふ蔓又カシラといふ
つをも用ふ山漆の肉付の皮少く巻くも是ハ
前小圖一す皆の下小こゆふの雪小あてまざる
とあり

○まよりハたて二尺五六寸より三尺余横一尺三寸山竹
をたぎめて作る。かきこゆふの二つハ冬の雪の
あつらひる時をこまぬゆふ用ふまきこゆふハ一
足もあゆまじゆふこゆふ人ハこゆふをまきこゆふ
製と扱ふ

雪譜二編卷之上

十五

文溪堂藏

右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具あまども薄
雪の国小用ある物小似るハこ小省く



百樹曰余
北越小遊び
牧之老人が家小
在り時老人

家僕小命とて雪を漕
形状を見せしる京水傍小
ありて此圖を写り穿物ハ
の機。縫あり戲小穿て
一歩も進をとあつる家僕があゆむ馬を御するごとく

○輶

輶 字彙 禹王水を治し時載する物四ツあり水舟陸舟車泥舟
輶 山中探書經 志云此輶といふもの唐土の上古よりありそり
彼ハ泥行の用あり雪の中不用ありと製作異なり輶の字美
。菟。様。秋馬諸書小散見を或ハ。雪車。雪舟の字を用ふる俗
用あり

そもく此輶といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く
且小作事最易きハ圖を見て知るべし堀川百首兼昌の哥小
初深雪降ふけくまあち山越の旅人輶小のまをこの哥を
て我國小そりをつらふの古をまづり前も志をくつらふごとく
我國の雪冬ハ凍さるゆゑ冬小輶をつらふ雪小ちりく擲と云
らる輶ハ春の雪鉄石のごとく凍さる正三三月の間小用ふごとのこ

雪譜二編卷之上

其時小つるを里俗輶道小ありと云

俳諧の季寄小雪車を冬と云ふハ詠よりまじぶとて雪中の物ありと
春の季小ハ似氣なり古哥も多し冬小あり實ハたがふとも
冬と云へ可あり

輶ハ作り易物ゆゑむらゝ農商家毎小是を貯ふまじぶ載るもの小
よりく大小品々ありむらゝ作りむらゝ皆同くやあり名も又あり只
大あるを里俗小修羅といふ大石大木をのまるとあり

山々の喬木も春二月のころハ雪小埋りたるが梢の雪ハ稍消て遠目ゆも
見ゆる之此時新を伐小易けむ農人等むらゝ輶を拖て山小入る或ハ
そりをバ簾小置もあり常小見上る高枝も埋りたる雪を天然の足
場と云へ心の俣小伐とり大くハ六把を一人まるとありさて下小三把
を並べ中ハ二把上ハ一把と云を繩あり強く縛り簾小臨が蹉跌小

凍る雪の上あるが幾百丈の高も一瞬の間ふらふらふらるを轄小
のせり引つる或はまゝ山小九曲ある穴件のごとく小傳しつる薪の
轄小乗り片足をあそびせり是めて楫をとり船を走らせり
難所を除く数百丈の麓ふらふら一ツも過ごさず其術学せり
自然小得る処奇く妙くあり

轄を引て薪を伐こといひあつせり行とまら二三人の食を草めて編
つる袋の小して轄小らゝらゝらことあり山鳥よこと事をあつてむらぐり
きてり袋をやぐりて食を喰尽まを樵夫のこと事をあつて今日の生業と
ことめりたまりしや焼飯小せんとて打より見まら一粒ものごとく鳥
どの八樹上小あつて啼人いむらぐり鳥を睨り罵り空肚をかつて
轄哥もいぞ轄をひきこつてり事もありことその人のことりき
そりをひくめらるるごとくことふ是を轄哥とてをあらら樵哥あり

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

唱哥の節も古雅あるものあり親あるひい夫山小入り轄を引てく
小遠く轄哥をきて親夫のくをあり轄小遇処せりむらふらで親夫
をば轄小積する薪小跨せり妻や娘がこと事をひきつことりも又轄哥を
うたうてくると質朴の古風今目前小存せり是繁花をまらぐら幽
僻の地あるゆゑあり

春もや景色らるのふらひ梅も柳も雪ふらぶら花も緑も
あつらるるふらふら二月の空はふらふら小あをまらつことり朗くあ
窓のふら小書讀をりも遙小轄哥の聞ふらふら春めきえうは
是ハ我のふらあつて雪国の人の人情せり

百樹曰我が幼年の頃ハ元日のあつて扇くと市中をうらあ
りく声あつて白酒の声も春めき心も朗ありか此声
今らるる鳥追の声はさつたり武家のつらつ町小遠所ハ

江鯨の鯨鯛のま〜とうる声今もあり春めくものこ三月ハ
桜草うら声小花をひひ五月ハ鯉く小白妙の垣根を去るふ
七夕の竹やこハ心涼〜師走の竹やくハ竹うりあり聞小忙物皆
季小應ドて声をな〜情小入る事天然の理あり胡笳の悲も又
然〜ん件くまの只人の声ありま〜や春の鶯ありひハ蛙夏の蝉秋
の初雁鹿虫の音冬の水鶴をや本編輯ほんへん輯哥しゅうかをきつ春めきえう
ま〜〜とハ真境まこと實事じつじ又客の至情あり我是われ小感こかんドてら小教言せうげん
を置かく輯哥しゅうかの春めくこと江戸人えどびと小かひひもよう〜ざる奇情あり
こと小似こにらる事猶諸国しよこく小もあ〜

糞ふんをのまらる輯しゅうありことそのまらるむふ小ちひさく作りさる物あり二三月の
ころも地と〜雪あ〜るハあ〜渺ひさく〜田圃たぼも是下小このちひさ在り〜持もち
分の境ざんもさ〜ふりうら〜ある小かの糞ふんのそりを引〜ら小來り

秋月産牧之草



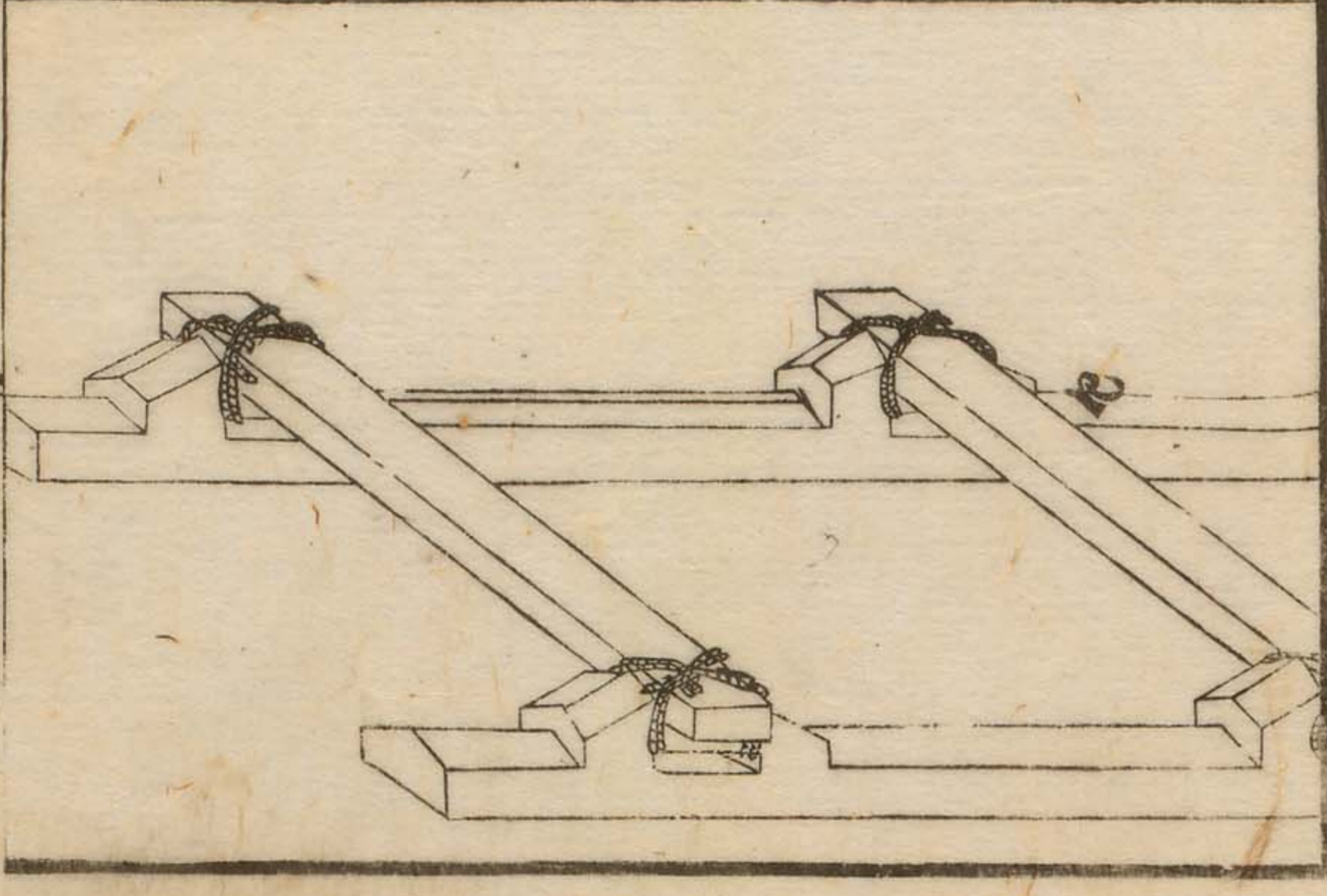
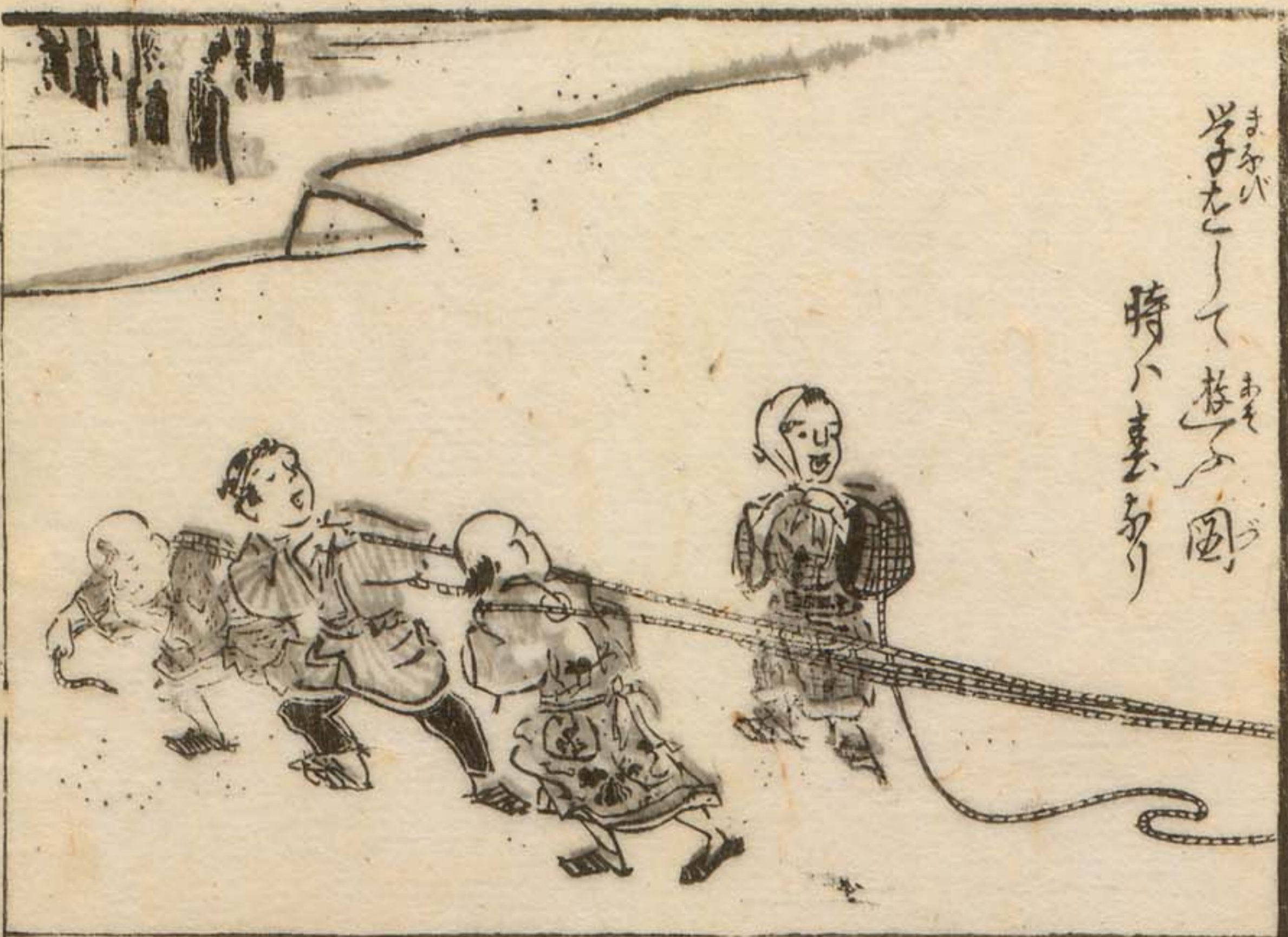
見童垂氷を
 輪のせ大持の
 つか

輪全図



形大小定尺あり載物よ
 随て造る木材ハ堅木
 坂用ふ
 まも
 梅符
 水越小千谷
 岩居

まふハ
 学をてして
 時ハ妻あり



雪のわふふ一點の目標もあきふ雪を掘と井を掘が如く小くは糞を
 入る小我田の坪ふらる事一尺をもあつらむこと我が農奴等もなる
 事ありむら荒くむら雪上何を目的めあて小くかかひなること問ひと小目あてと
 なる事ハあつらむ心ふらむとちの所との坪小をむら事ありとい
 つり所ところ為ハ賤けしもも藝術の極意もも小あつらむとちの坪小をむら事ありとい
 ころ小あつらむ初学の人藝小進の一端を示す

輜の大なるを里言小修羅といふ事前小といふこと小大材木あるハ
 大石をのせくひくを大持といふひらせ京都本願寺御普請の時末口
 五尺あり長さ十丈あまりの槻けきをひき事ありさかき時ハ修羅を
 二つも三つもかきあり材木ハ雪のあつらむる秋伐りきそのまま山中小もき
 輜そりを用ふる時小いころひき大材をもひき雪の堅かたを
 あつらむ田圃も平一面の雪のあつらむむら直道ちうだう小ひきひきゆゆゆゆ甚

舟あり修羅小大綱をつけ左右小枝綱ひくまぢもありまのつさね小
本願寺御用木との小職を二本持つ信心の老若男女童等までも蟻の
如くあつまりて道をひく木やり音頭取五七人花やうあつ色木綿の衣
類小彩帟の麾採て材木の上ふあつて木やりをうらふその哥のツッ小
デウさだ〜兎鬼が〜耳いあぜあづら〜母の胎内ふ〜時小笹の葉
をのまゝてか〜そまを耳があづら〜大持がうらんど〜花の都〜めりた〜と
ひ〜百人〜い〜〜そのこまはま〜びあつて〜い〜と〜
兎曹ら〜手遊の軸もあり氷柱の六七尺もあるをそり小のせて大持
の学びをう〜木やりをう〜い引あつて戯とあそぶら〜暖国ゆい
あつま〜〜聞もせざる事あづ〜猶軸小種〜の話あ〜と〜との
〜と〜〜せり

○春寒の力

雪譜二編卷之上

春ふ〜寒氣地中より氷結あづるその力礎をあげ〜縁を
反〜あ〜い〜踏石をも持あづる冬〜い〜やど寒〜と〜か〜事〜
〜雪も春〜凍〜軸をもつ〜あ〜屋根の雪を掘のけ〜つ〜
上〜を里言ふ掘揚とら〜前〜往來の路ゆも掘あげあり〜山
をあもゆも春雪のこ〜ふ〜雪の山小箱梯のご〜階を
作り〜往來のた〜り〜と〜あ〜の所ら〜つ〜ふ〜あるゆも下踏の齒小
釘を〜打〜蹉跌ざる為と〜唐土〜是を標と〜山小の〜
ま〜履と〜標和訓カ〜ジキとあり

○シガ

冬春ふ〜雪の氣物ふ〜霜の〜あ〜る是を里言ふ
シガとの〜障子の隙より〜雪の氣入り〜坐敷小シガを〜時あり
此シガ朝暾の温氣をう〜る処の〜解〜あつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪ふらぶらとふるも梢ハ雪の消るふシガのつきふるハ玉めて作り
ふる枝のやうふら見事あるものあり川辺あどをさうく者ハ髪うみの毛
ふもシガのつく事あり此シガ我ガ塩しほ沢ざいふハまきありちり郡ぐんの中
小出嶋こいでじまありふら多一大河ハ近きゆ水みづ氣きの霜しもとふるゆふあふん

○初夏の雪

我国の雪里地ハ三月のところふらつぎ次第しだいと消朝けしあさハ凍こらと鉄石の
如くふるも日中ひちゆうハ上より下よりふるもまきふる月末げつまつふらつぎ目めも田
るやどふ昨日きのう今日けふと雪の丈だけ低ひくありゆふ雪も降ふまぐと雪圃ゆきぼと
りこ取のけ家のやとり庭にわあど雪をも掘かまつるふ雪凍りこ堅かたきゆふ
雪を大鋸おほのこぎりゆら大鋸おほのこぎり。里言りごふひきりりりまつるその四角しかくある雪を脊負せおひ
あふハ擔持おのひもちふふるあど暖国ぬんこくの雪とハ大おほ小こ異ちがり雪ゆきふ枝えだを折おと下したと杉
丸太まるたいをとへるるりりげげまきふる庭樹にわぎあど解とけハささふ梅うめと

雪譜二編卷之上

雪の中ふ蒼あざをふらとて春待はるまちわありとて春の末あり此時このときふらとて去
年十月このとせの十月以來このとせより暗くらりり坐敷ざしきもやうり明ありりあ盲めくら人の眼まなこのひらき
ふる心地こころぢせうとて雛ひなハふるも桃ももの節ふし供たまハ名なのふらとて花はなハまらりり
あり四月このとせの四月ふらとて田圃いなほの雪も斑まだらふきふる去このとせの年秋あきの彼岸ひらふ時ときふる野
菜なのふる雪の下したふ崩おとれ梅うめハ盛さかをまぐり桃櫻ももざくらハ夏なつを春はるとて雪ゆきふ
埋うりふる泉いづみ水みづを掘かりか去年このとせの初雪はつゆきより以來このとせより二百日ひゃくにじゅうにちあり黒くろ闇やみの水
のふるありし金魚きんぎょ鯉こいあんどらりりげげふ浮う泳およも言ことやとてりりりや
とらりり五月このとせの五月ふらとて人ひとの手てをつげげる日ひ蔭かげの雪ゆきハ依然いぜんとて山やまを
あせり況いはや山林さんりん幽谷ゆうこの雪ゆきハ三伏さんぷくの暑あつ中なかつあも消きる所ところあり

○削氷

百樹ひゃくじゆ曰い余われ丁酉ていゆうの年としの晩夏ばんげ豚兒とんご京水きやうみづを従したがへ北越きたつふ遊あそり時とき三國さんこく
嶺たかねを踰こり六月このとせの六月十五日じゅうごにちありりりふ谷やの底そこふ鶯うらをきりて

足あしのこ小こ學がくを聞く我われもま谷やのりりとるりの山のふと
拙せつ作さくのままも實じつ境きやうのまま記を此嶺りやうららとら四し里り山さん徑けい隆りゆう堀け
數すう武ぶも平坦たんの路を踐む浅貝せんとりの小宿しゆくり猶〇二居い嶺りやう半はんを越
て三俣まへとりの山取と小こ宿しゆく一いつ芝しば原げん嶺りやうを下り湯沢たく小こ抵たいんととる途とちよて
遙ちやう小こ一いつ楹りやうの茶店てんを見る庇のゆと小床ゆかありと浅せんき箱やうのゆの小
白しろく方ある物を置く遠目とと石花はな菜なを賣る口の上と
ぞともゆひのづらも山をさるまと暑まさけけけけ汗あせもとと小足あしも
つつまつまつまつ茶ちや店てんあらうらうらうら京きやう水みづとと小こふちうらりり腰こしを
うけかの白しろき物を見るまととるてんゆあらうら雪ゆきの氷ありけり六
月つき小こ氷こをとる事江え戸との目の見最さい珍しんけけまままま下くだりり熟じやく視しバ
深ふかさ五寸すん計けいの箱小こ氷こをいととる中小こ小こ踏ふみ石いしどの雪ゆきの氷を
あまりり賣う茶ちや箱こ問とバとる山蔭かげの谷小こあらうらりめ一いちたまりり

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

ままめめんんとりのまままままととももひひららまままま箱はこ菜な刀やいばを把持とのまままと
とと音ねとと削けりし豆まめの粉をうけけり氷小こ黄き粉こなをうけけ
る江戸との目の見最さい珍しん可か笑わらいま京きやう水みづとと相あ目めとと笑わらいま
つつ是この價をととと今いまももとと豆まめの粉をうけけるととと兩りやう
掛か小こ用よう意いとと沙さ糖とうをうけける割氷けりひ小こ齒はとと暑あつままりり
とと珍めづり事とと珍めづり事とと珍めづり事とと珍めづり事とと珍めづり事とと珍めづり事
そそももととのけけり氷こととの物を珍味めいととる事古ふる書しよ小こ散さん見けんせせ
その中小こ定じやう家か郷きやうの明月めい記き小こ曰い「元げん久きう二に年ねん七しち月げつ廿にじふ八はち日にち途とちより和
哥か所しよ小こ参さんる家隆りゆう朝あ臣しん唐たう櫃び二に合がを取寄よらる〇破子こ〇瓜〇土器き
〇酒しゆ等とうあり又寒かん氷ひやうあり自刀とを取り氷を削と奥小こ入いる事甚しん一いつ
本ほん書しよハ件の元久きう二に年ねん乙いつ丑しうより今天てん保ほ十じゆ一いつ年ねんまま心こころ凡ぼん六りく百ひやく三さん十じゆ余よ年ねんを
漢かん文ぶんとと歴れきて古人にんの如く削氷ひやうを越後ごの山村さん小こ賞しやう味みととる事珍めづりとととと

奇とまきづー實じつ小好こう古の肝きまを清きよくせ

○按あふひとの氷こおりの本訓ほんくんとなりと訓しんハ寒凝ふえらの美みありと士清翁しきよが和わ

訓しん葉えふらり氷室いむろといふ事俳諧はいかいの季寄きよせといふものありとゆゑ

とまきあま普人あまの知ちりたる事ことゆゑ周禮しうらいありとまきあま唐土たうどのむらゝめ

ありとまきあま御国みくにハ仁徳紀にとくぎ小見こみとまきあまとまきあまの古ふるきをしる

了延喜式えんぎしき小山城こやまぎ国葛城郡くつきまき小氷室こひむろ五ヶ所いむろをいづせり六月朔日

氷室ひむろより氷こおりをいづと朝庭あそ小貢献こうけんを諸あま氏しんも領賜りやうみ事

年とし毎ごの例れいありとあり前まへ小引こひ明月記めいげきの寒氷かんこハ朝庭あそより

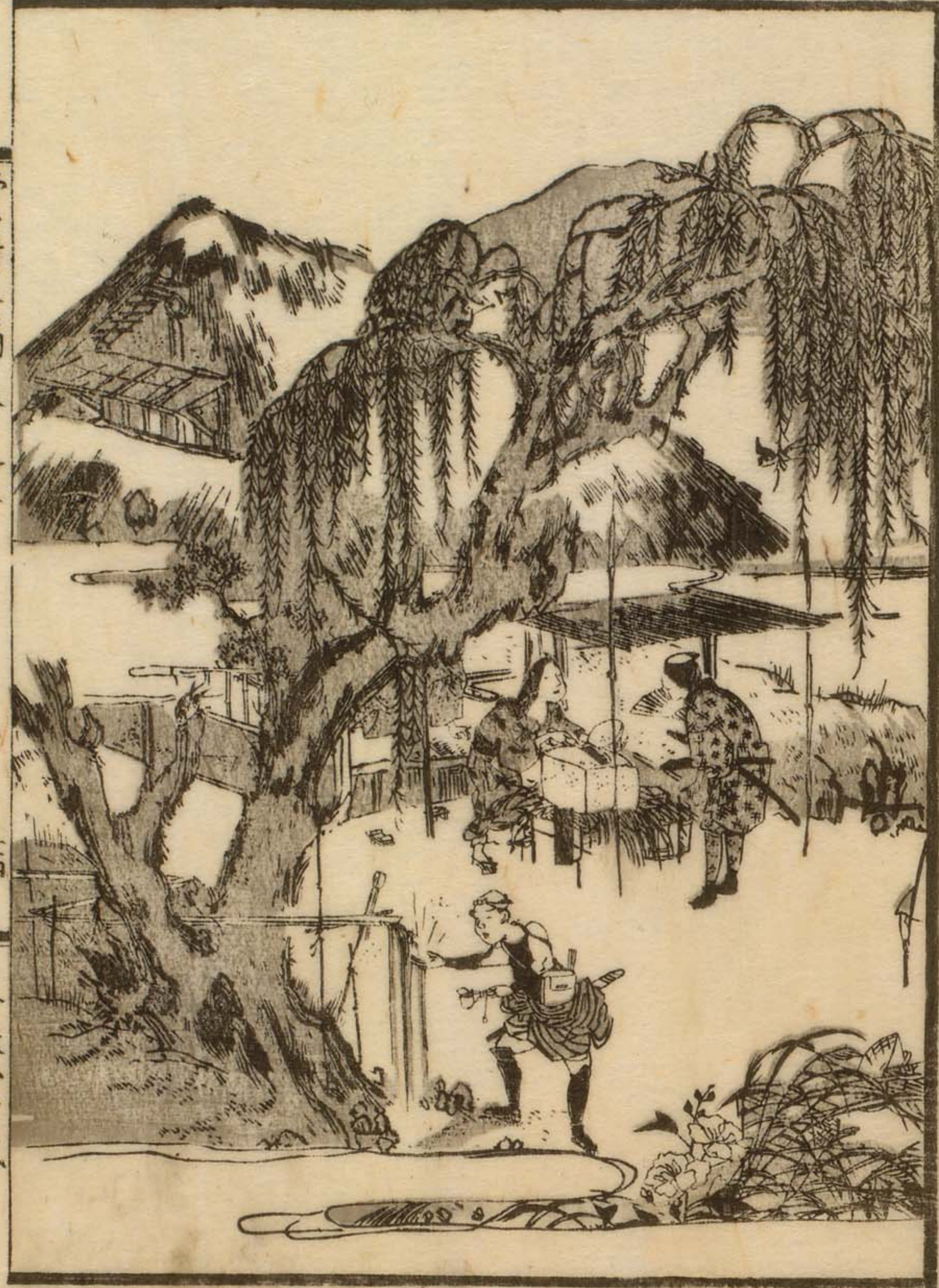
の古例これいの賜たまふあづとあまあま割氷はきりを賞味しょうみせとまきあまハ

七月廿八日あり六月朔日ろくがつしつがひなりとあり氷七月廿八日まで消きえるあり

とまきあま明月記めいげきハ千字百摹写せんじひやくもの書しよありとまきあま七八六しちはつろくの詔あまのたまひとまきあま氷室ひむろを

出いし六月の氷朝ひのあを待まちとまきあま蓋貢献ふたこうけんの後のち氷室守ひむろのりが私ひふ出いせも

六月 鬻雪圖



志るべしづびのさき氷室とハ厚氷を山蔭の地の極陰の地中小藏
 置屋を作りつけ守らる古哥ゆもよめる氷室守是あり其
 氷室ハ水の氷残をさあかくやう小諸書の注記にも見えしづ水
 氷とるハ不潔なり不潔をりつて貢献ふるをさつす且水の氷ハ
 地中小在りても消易ものあり是他あり水ハ極陰の物ありゆゑ
 陽不感ト易ゆゑあり我越後小削氷を視て思ふかの谷間小
 在といひハ天然の氷室ありむしりの氷室といふ雪の氷りむら
 ありづ極陰の地小竅を作り屋を造り掛別小清淨の地小垣を
 めづしして人小踏せむ鳥獸ゆも織さる雪を待雪ふるをば
 此地の雪をかかぬ竅小撞と埋り人是を守り六月朔日是を開最
 清淨ある所を貢献せしめん欵是已が臆断を以て理小就て古
 の氷室を解するあり

○氷室の古哥枚拳わづつせつうしどかの削氷を賞味し玉ひつる定家小拾遺愚州夏あつあぐ秋風なむぬ氷室山こほりふゆぞ冬をこのとせとわひ

又源の仲正小千載集「下くださの氷室の山のおを櫻ももを消残りきえのこる雪小見えたる一首の意こころ氷室ハ雪の氷あつてどかもしる今加州候毎年六月朔日雪を献けんト玉も雪の氷ありこと也も古の氷室ハ雪の氷あるをかものづのよそかの茶店ちやてんわき雪の氷をあげてひひふその次日より塩沢しちざわの牧がしえ老人が家不在ありふ日毎小氷ここりとよびて賣未る山家の老婆らうをあどりの掌てやどるを三錢さんぜんふらうとらる二三度賞味せしがのちあハ氷ともかみらるる物を得えがたハ珍めづらしい得易えまいりづらう人情にんじやうの恆つねあり塩沢小居しちざわく六月の氷のめづらしざらう吉野きちのの人ハ一の花はなもかみらるる松

雪譜二編卷之上

鳥の人ハ松鳥の月ともかみらるる飽ある物ハ孝心ある我子の顔かほと藏置たくわ黄金こごうの光ひかりあつて

○雪の多少

越後国南ハ上州じやうしゆ小隣ことなる魚沼郡うをぬまぐんあり東ハ奥州羽州おくしゆうへしゆ隣となる蒲原郡はやはらぐん若船郡わかしづぐんあり国堺くにさきハいづとも連山れんざん波濤はたうをあらめ雪多ゆきおほく東北とうほくハ鼠ねずみが岡がき郡ぐんの内うち出羽でひの西にしハ市振いちぢり越中えちゆの堺さき小至こいたの道みち八十里はちじゆり間都みやこ北きたの海濱うみづらあり海気うみけ小より雪一丈いっさうふいては年とし少すくあり又消きも早はやく頸城郡けいじの高田たかたハ海うみを去事さ遠とほく雪深ゆきふかく文化ぶんかのちゆり大雪おほゆきの時高田たかたの市中しやちゆう埋うり閣夜あんにやのごとく昼夜ちゆうやをさぐる事こと十余日じゆじゆにち市中しやちゆう燈との油あぶら尽つく諸人しよじん難がた夷ひらせ小御領こごりやう主ぬしより家毎いへごと小油こあぶらを賜たまひ事ことあり此こゝ時とき我塩沢われしちざわも大雪おほゆきゆき夜よ昼ひるをさぐる事こと四五日しゆごにち連日れんじつ家いへの雪ゆきをさぐる事ことあり人ひと氣け鬱ふさ悶もんて病やまをさぐる事ことありけり

百樹曰余牧之老人が此書の稿本こうほん小就つとて増修ぞうしゆの説せつを添上そんじやう梓しの

為なる小傭書しょうじゆ授まかる一本いっぴんを作つくるをりも老人が寄よる書中しよちゆう小

當年たうねんハ雪遅ゆきおそく冬至とうじ小成せうはともな馬中まぢゆうの雪一尺いちせき小ちさるを此日このひ次つぎて六

今年ことしハ小雪こゆきあると諸人しよじん一統いつたう悦よろこび居いる所ところハ廿四日じふににち十月じふににち黄昏たふしより

降ふりて廿五六七八九日にじふごふくはつまで五日ごにちの間ま昼夜ちゆうやふつもの事ことをりて一丈

四五尺しよごふくふもちよび申まをひ毎主まいしゆの事ことあつて不意ふいの大雪おほゆき小ちさる廿七日

より廿九日にじふくにちまでま馬中まぢゆう家け毎まいの雪掘ゆきほり小ちさる混雜まじりいりま簷外えんがい急玉きやくぎよく

山やまを築きずく外ぐわいつものいりてま惘むさうり申まをひ今日けふも又大雪おほゆき吹ふく相成あひな家内けいだい

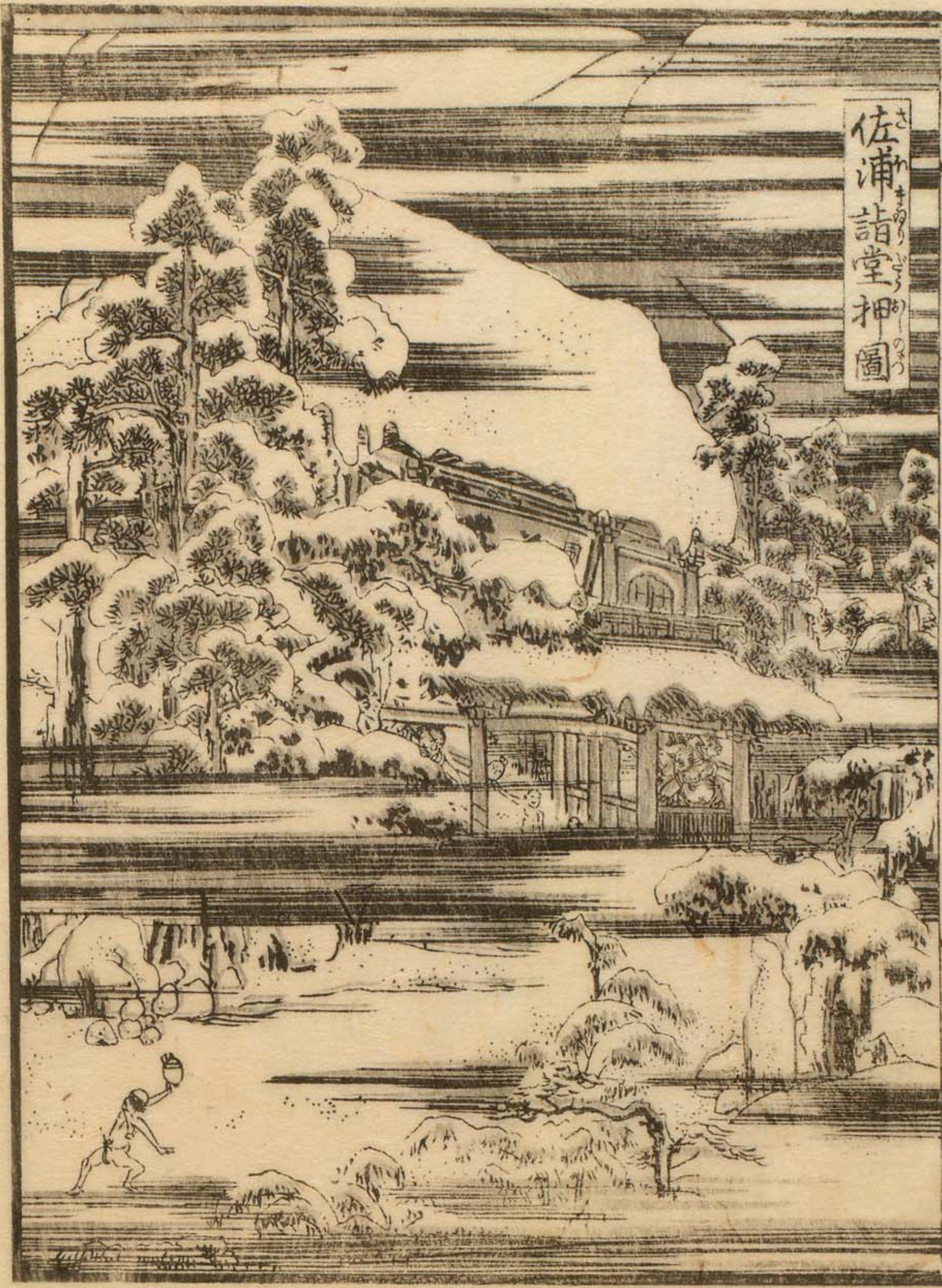
暗くらく蠟燭ろうそく小ちさる此状このじやうを志しすめ申まをひ何程なんぢやう可降かかう哉や難計なんけい一同心いどうしん

痛いたいり居申いすまをひ下畧是當年このとねん天保十てんぽうじゆ十一月じふいちごふにち廿九日にじふくにち出でる尺翰せきくわんあり

此文このぶんをりても越後えちごの雪ゆきを知しるべし。余われ越後えちごの夏なつ小遇こあひり小五

穀蔬果こくそくくわいの生せい育よく少すくさる雪ゆきを畏おそる色いろ多おほく山景さんけい野色やいろも雪ゆきあ

佐浦詣堂押圖



昆池門堂



春の梢
雪の消るのち
再び雪の
降る景

りしといふおもしろき雪の浅き他国小同ト五雜組五雜組小部天部百草雪を畏おそれ
 むくく霜を畏る蓋雪ハ雲小生トく陽位也霜ハ露小生トく陰かげ
 位也といふり越後の夏を視て謝肇淛しゃせうせきが此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方へ二宿越こえ六日町浦佐といふ宿ありて小普光ふくろくわう
 寺といふ真言まごんあり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳ついでり此堂大同二
 年の造営ありとを修復の度毎小棟札あり今猶歴然と存を毘沙門の
 御丈三尺五六寸往古椿沢といふ村小椿の大樹ありとを伐て尊像を作り
 すとをさく作名ハ傳ついでりむとまてぬ像材椿あるをのりて此地椿を薪たきとすとむ
 りるむとを崇たかありゆゑ小椿を植む又尊そん灵鳥れいじうを捕とらを忌玉ふゆゑ小諸鳥
 寺内小群ぐんをありて人を怖おそむ此地の人鳥を捕とらありひハ喰くハ立所たつところ小神
 討うありたといふ遠郷あんとくさうハ聳たか娘むすめ小ゆきとて年を歴へても鳥を喰くむ必凶應あまのこ

あり天験の照くる事此一を以て知るべし遠郷近邑信仰の
人多しむしより此毘沙門堂小於て毎年正月三日の夜小限りて
堂押との事あり敢祭式の礼格とある小あり福むしより有来
たる神事あり正月三日ハもとより雪道ありとも十里廿里より来りて
此浦佐小一宿一此堂押小遇人もあま近村ハハもとよりあり
○さて押小来りし男女まづ普光寺小入りて衣服を脱了身小持たず物も
もどろ小置棄婦人ハ浴衣小細帯まも小をたらしもあり男ハ皆裸あり
燈火を點ぶるところの七間四面の堂小ゆる裸の男女推入りて錐をた
つる地より余も若かりしころ一度此堂押小あひりか上(あ)げさる手
を下(さ)ぐる事もあつたやど小逼り立けり押とのハ誰ともあつサン
ヨウくと大音小呼つる声の下小堂内小充滿する老若男女ヲサイ
コウサイとよまがりて北より南(ど)ろくと押又よまがりて西より東(ど)

雪譜二編卷之上

文溪堂藏

あつるごと此一ちりく男女俱小元結おのづから髪を乱し髪
甚奇あり七間四面の堂の内小裸あり人ともあつてあげさる手もあつた
事ありぬやどあつた人の多きよりあつて此諸人の氣息正月三日の
寒氣ゆゑ烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことごとく為小暗く人の
氣息屋根より小露とあり雨のごとく小降人氣破風よりもよ雲
の立のやぐ如く婦人稀小小兒を背中小むをびつけく押も有とも
あつ小兒啼あつた常とあるの不思議あり況此堂押小いさうも
怪敷をうけたる者むしより一人もあつ婦人のあつた湯具むしり
あつもあまど闇処小噪雜し一人もあつりかめし事ませすこと
あつて毘沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸ある所ハハ人氣少く堂内
の熱もあつと燃がごとくあつた願望小よりてハ一里二里の所より正
月三日の雪中寒氣肌を射がごとくも厭む柱のごとく氷柱を裸身小

脊負て堂押小まきするもあり二たし一三たし一小のまきぶらうある人も
熱こと暑中のごときゆゑ堂のやうふある大なる石の盥盤小入りく水を
浴び又押小入るもあり一ト押おしへ息をまむ七押七踊あそび止を定寺
踊といふも桶の中小半を洗ふがごとくゆゑ小人なる満身小汗をあらがひ
第七をどり目小のりく普光寺の山長耕夫の長を以て手小筋を持つ人の手輦小乗
て人のまき入り天音ふりし「毘沙門さぬの御前小黒雲が降」とモウ
衆人「あんどくとくまづつとモウ」山男「米がらうとくとくまづつとモウ」とさらさらををり
あつひ此きら内へ摺バ凶作ありとく外へ」とまきあつひ又志願の者兼て
普光寺へ達しむきく小桶小神酒を入と盃を添て献て山男挑燈をりたせ
人をむりくする者サ人をむりくまきふまきく堂小入る此盃手小入る幸
ありくく人の儀をりく取んとく神酒ハ神小供さる状く人小
散一盃ハ人の中へ擲ことを得る人の宮を造りて祭る其家あるを

雪譜二編卷之上

おもむきの幸福あり此くらんをも争ひ奪ふくつて破るその骨一
本よりとも田の水只さくむけこの水のかる田ハ熟實虫のつく事あり
神灵のあつする事あり神く人の知る所あり神事をり人々離散
く普光寺小入り初葉置る衣類懐中物を視る鼻糸一枚く小失
る事あり掠さば即座小神罰あるゆゑあり。さて堂内人散く後々の
山長堂内小学幹をちりしむく夏例あり聖朝山長神酒供物を備ふ後
さぬ小進く捧ぐ正面小まむを神の忌ぬふと昨夜ちりしむきく学幹寸断
小折あり是人散てのち諸神ら小集りく踊玉ふゆをを踏をり
玉ふありといひつる神事ハまきく見戯小似すること多しあつひも凡慮
を以て量識づくと此堂押小類せし事他國ゆゑあつひ姑記く類
を示せ

北越雪譜二編卷之一終